

アルセンヌ氏の仮放免を

日基教団経堂緑岡教会が署名活動決定

コンゴへの送還は危険

難民申請の却下で訴訟中

「夫、アルセンヌ・グロジャの仮放免と、彼への長期ビザが与えられるよう、お祈りと支援をお願い致します」。こう呼びかけているのは、日本基督教団経堂緑岡教会員の笹井小夜子氏だ。笹井氏は、入国管理局への難民申請申し立てが却下され、現在は鉄格子の中に拘束されているアルセンヌ氏と昨年12月に獄中入籍した。経堂緑岡教会の長老会は5月8日、アルセンヌ氏の仮放免を求める署名活動を同教会の名前で展開することを決定、現在文面の作成に入っている。

アルセンヌ氏は、アフリカ中央部にあるコンゴ民主共和国のイツリ地区の出身。同国では現在激しい民族抗争、反乱が起こり、その中で皆殺しにされようとしているのがヘマ族で、すでに5万人が虐殺されたといわれている。アルセンヌ氏はそのヘマ族に属し、家族全員が殺されている。

またアルセンヌ氏は王族の直系で、父の死後部族の首長を継承、それを認めない同族の反対派からも毒殺や拉致などが計画され、常に命をねらわれてきた。

身の危険を感じ、ブーニャ大の歴史学教授の職を捨てて、首都キンシャサの日本大使館に駆け込み、2003年の9月、観光ビザで日本に入国した。

観光用の在留ビザの期限が切れる前に、難民申請をしたが否認、異議申し立てをしたが却下され、拘束。国外退去を命じられたが、母国への送還を拒み退去命令の執行停止を求めて訴訟中である。これらの手続きの協力をしたのが、日本ナザレン教団三軒茶屋教会員の前田力氏。青山学院を会場に開かれたイースターの集いに来ていたアルセンヌ氏と知り合ったのがきっかけ。アルセンヌ氏と獄中入籍した笹井氏は前田氏の経営する会社の社員。前田氏の好意で同社に出入りしていたアルセンヌ氏と知り合うことになる。

アルセンヌ氏は週に3回、熱心に麹町教会（東京都千代田区）で日本語を

学んでいたため、自由に日本語を話せ、漢字交じりで文章を書くことも出来るように上達した。

クリスチャンホームに育ったアルセンヌ氏は、つらい境遇でも笑顔と優しさを失わなかった。「この人は神に対しての絶対の信頼をもっている」と、笹井氏は感じた。

親身になって笹井氏の相談に乗ったのが日本基督教団経堂緑岡教会の松本敏之牧師。笹井氏は今年のイースターに松本牧師から受洗した。

難民認定の申請を3回したがすべて却下。母国へ戻るとなぜ危険かを証明する資料に欠けるといのが、却下の理由。アルセンヌ氏の身の危険を報じた2003年のフランス語の新聞記事を提出しても、「本物かどうか不明」と、認められなかったという。

アルセンヌ氏が突然拘束されたのは今年の9月。品川入国管理局の呼び出しに出頭したところ、その場で拘束された。

前田氏と笹井氏の一家は、彼が拘束されてから個人で1300人の署名を集めてきた。「彼は未来の平和なコンゴ再建のために欠かすことのできない人物。なんとか、救援の輪を広げねば」と語っている。

キリスト新聞2005年5月21日
第2921号より

《望楼》

「日本で生きることができるよう、許可を与えてください」。命の危険を感じ、母国コンゴ民主共和国を離れたアルセンヌさん(45)の叫びだ。日本の6倍以上の土地に眠るアフリカ最大の豊かな鉱物資源。その豊かさと対極の一人あたりの年間平均収入100ドルの極貧生活。資源の権益獲得のため、欧米など諸企業から、武装勢力に軍資金が流れていく。同国で94年から内戦による死者は400万人以上。特に、アルセンヌさんの出身地イツリ州のヘマ族とレンドゥー族の抗争は激しく、レンドゥー族はヘマ族皆殺しを計っている。ヘマ族のアルセンヌさんは父の特別な地位を継承し、それを認めない同部族高官からも命を狙われ、死の危険と隣り合わせだった。日本を選んだのは、平和国家のイメージがあったためだが、現実の日本は難民を一切拒否し、門戸を硬く閉ざす非寛容な国であった。鉄格子の中に収監されたとしても、実刑を受けた犯罪者なら服役期間を過ぎれば出獄できる期待がある。しかし、アルセンヌさんは、将来の見通しがもてない信仰によって過去の苦難を乗り越えてきたが、今、笑顔が消えかかっている。私たちの手で彼の笑顔を取り戻せないのだろうか。 (Y)